

woman たらす



浮織
(ラオス)

緻密な文様、高い技術

て手作業。糸は草木染め。浮織という手法で、ラオスの伝統文様を織り上げました。

刺しゅうにも似た立体感のある文様には一つ一つに意味があり、例えばカニは豊作、ヘビは魔よけ、竜は不老長寿。現地では今も女性たちが儀式などで身にまとう民族衣装「パービアン(肩掛け)」などに浮織を用いています。

ラオスを初めて訪れたのは15年ほど前のこと。「高い精神性とあつい信仰心に育まれた手仕事の残る国」という雑誌の記事を見たのがきっかけでした。40代半ばで大病を患った私は、まだ治りきっていないにもかかわらず、記事に導かれるように一人旅に出ました。

浮織に出合ったのもこの旅先

です。早朝、托鉢する僧侶に寄進しようとひざまずく現地の女性たちが体に巻いていたのがパービアン。さまざまな願いや祈りを込めて織り上げる布だと知り、「私も巻きたい」と思ったのです。それが帯作りに結び付きました。

今思えば人生の大きな節目でした。その後も折を見てラオスを訪ね、現地に帯柄を提案しながら注文を続けています。「もう一度頑張ろう」と思わせてくれたラオスに、感謝とささやかな恩返しを込めた取り組みです。

ラオスを訪れるたび、自然を受け入れ、祈るように暮らしていたかつての東北の姿が重なって見えます。だからでしょうか、ラオスの帯は不思議なほど東北



白鷹鬼しほお召しに映えるラオスの浮織の帯

の着物によく似合います。

(田中陽子・「暮らしのクラフトゆずりは」店主)

〈第4金曜日掲載〉